

北都

寒燈夜話

小栗外傳卷之五

東都

絳山歌醜陳人戲編

第九編

貞婦夫婿を待つ節を全き
良馬名士小達て能を顕を

北
204
7

東

且説其時一人の了髪出でて這裡に入らせると助守かきと取て
おくるるにこれ処も誘ふ六十年の老女待らけて恭しくれを傲君の
心忘れやあるあらめ。婿ハ庄司が母あて作りぬ何よりハ恙なれ先景
か母お差つがれば大に敬されこそも奈何と云ひまや此處もい
達之と云ふと河上六城爾ら審まの道埋まり是れは多々れ縁故
あり。何を前中物と思ひまらふにけは先づへとをりん

此家の姫こそ君と許家ある照天姫あておろすと。姫君不図も今百
君をえまひ強て此家よ誘ひ多し。とやへ知さず助を再火野るは友
あて城をえろ。いと怪しとあやふ照天の赤ありと。さつくと不審
暗さる。其故より。狐や。後。眉を疲めて。同。城。噴。つ。
語。出。る。姫君此地方へ。つ。り。あり。して。前。年。名。武。の。家。永。亡。び
まひ。折。う。ら。姫君の叔父君横山を郎安秀との侍従君と姫君と
信ひ。故。を。退。ま。ひ。雨。を。吟。呻。は。る。が。横。山。及。若。う。り。付。立。人。の。男。子
を。持。し。不。没。落。の。由。附。乳。人。不。誘。行。出。給。れ。ど。り。が。立。人。の。男。子。成
人の。后。身。の。う。れ。形。ま。ま。に。緑。林。の。群。入。り。終。小。賊。の。大。軍。と。あり。
此。地。方。小。餘。且。居。り。安。秀。と。の。こ。と。を。知。り。尋。り。ま。り。て。あ。れ。ば
頼。之。終。は。奴。子。六。人。白。波。の。楫。深。し。と。い。と。豊。世。を。送。り。ね。立。人。の。男。子

といひ。嫡男次郎安春三男と三郎安武四男を四郎
安高五男と五郎安永といひ。渾力量早業の悪徒。然るを郎安
次郎安春の二人姫君不致想。兄弟争つて。悪。と。る。あ。そ。父。の。横。山。を
えて。心。裡。お。ち。り。あ。う。各。武。が。家。の。こ。と。然。る。人。を。照。天。お。配。遇。ハ。家。名
を。再。與。し。多。ん。と。濃。倉。と。の。命。の。は。豫。て。一。色。の。云。は。る。と。あ。あ。ま。こ。を
我。見。照。天。を。悪。と。る。こ。と。幸。な。う。一。人。の。子。を。り。て。照。天。と。夫。婦。は。名。武。の
家。を。再。興。し。旧。領。を。復。し。る。と。そ。樂。し。か。ら。ん。と。想。下。し。け。姫。君。の。祝
子。斯。と。知。し。ま。あ。じ。う。れ。ば。親。子。と。の。あ。や。め。し。め。い。と。あ。う。ち。憂
ふ。お。ほ。し。が。ら。せ。ま。ひ。君。と。い。ひ。逃。走。一。日。こ。こ。し。の。あ。う。ち。結。成
君。の。あ。す。り。お。これ。を。苦。し。病。ま。ひ。終。え。ら。う。好。く。放。多。し。ぬ。その。後。を
姫。君。世。々。ね。み。な。く。涙。の。乾。く。ひ。ま。も。な。く。あ。ら。ま。横。山。安。秀。及。若。う。り。お

慰の只願我子と誓縁のこを勅まど姫の堅く辞の入り。されども安
 秀とてんやまごて。密々を郎安後をりて女婿よせん。誤れば二郎安まよ
 悲を言とりて娶んとされば兄嫁みほしく。闘争にもあつてぬべし
 えりふ父の横山もこを愁ひ。夢時誓縁の沙汰止まね。再ハあれ
 と強うも我子のうら一人を照天ハ娶せ名武の家を押し領せんと想
 公頼あれ免角ハ姫君の公より。新婦おせせや。とりうくに愛恤
 まは。姫の言のこを。何事にも。その云が。あくなく。おたね
 これ因を。負せて。其子と誓縁。ささぐれ。あり。姫君ハ。まよ。一。猜
 唯針の。走。よ。け。さ。る。ぐ。こ。と。く。此。う。ち。お。君。の。在。家。必。を。尋。ひ。此。地。方。を
 逃。れ。出。る。人。と。お。ほ。せ。ど。使。を。養。る。人。も。な。く。自。ら。出。る。人。ハ。深。窓。お
 生。ま。る。ハ。世。間。の。ま。ハ。東。街。西。街。ど。お。知。り。ま。さ。い。ハ。心。よ。念。ト。ま。の。み

あていと患ひ屋。も折ら。枕簾倉。も所用。ありて。ま。わ。り。は。し。る。ふ
 道。を。過。失。の。処。ハ。吟。呻。ひ。世。家。ハ。一。夜。の。宿。り。次。を。ね。ふ。其。夜。姫。君
 の。心。前。ハ。ま。よ。ま。ご。て。事。は。い。ま。あ。ら。ち。姫。が。身。の。入。の。こ。と。は。へ。わ。げ
 ん。じ。が。既。ハ。心。前。を。退。出。臥。下。入。り。睡。ま。つ。つ。ん。と。ま。よ。と。れ。姫。君
 忍。み。ち。り。只。一。人。枕。が。枕。辺。ハ。あ。ら。一。奴。も。ハ。助。重。君。と。許。家。あり。照。天
 たり。汝ハ。我。ま。よ。由。緒。ある。人。か。れ。夫。ハ。在。家。必。を。知。り。け。ら。ん。今。う。ち。ハ
 密。々。ハ。清。江。好。ま。ご。と。と。命。め。り。ま。ご。と。ま。氣。落。城。の。後。ハ。在。家。を
 知。り。ち。も。ち。移。る。其。ま。の。の。れ。ま。た。吉。ま。の。ひ。じ。と。れ。が。あ。ら。今。ま。り
 此。亦。ハ。居。て。奴。家。ハ。力。ハ。添。て。よ。と。ま。ま。の。命。の。車。ハ。か。く。ま。よ。の
 姫。君。ハ。給。事。ハ。名。を。玉。手。と。名。れ。ま。よ。夜。ハ。側。ハ。侍。り。ぬ。嫁。心。ハ。ハ
 君。の。在。家。必。を。知。り。ぬ。姫。を。使。ひ。ま。わ。り。ハ。夫。婦。の。心。對。面。ら。は。し。や

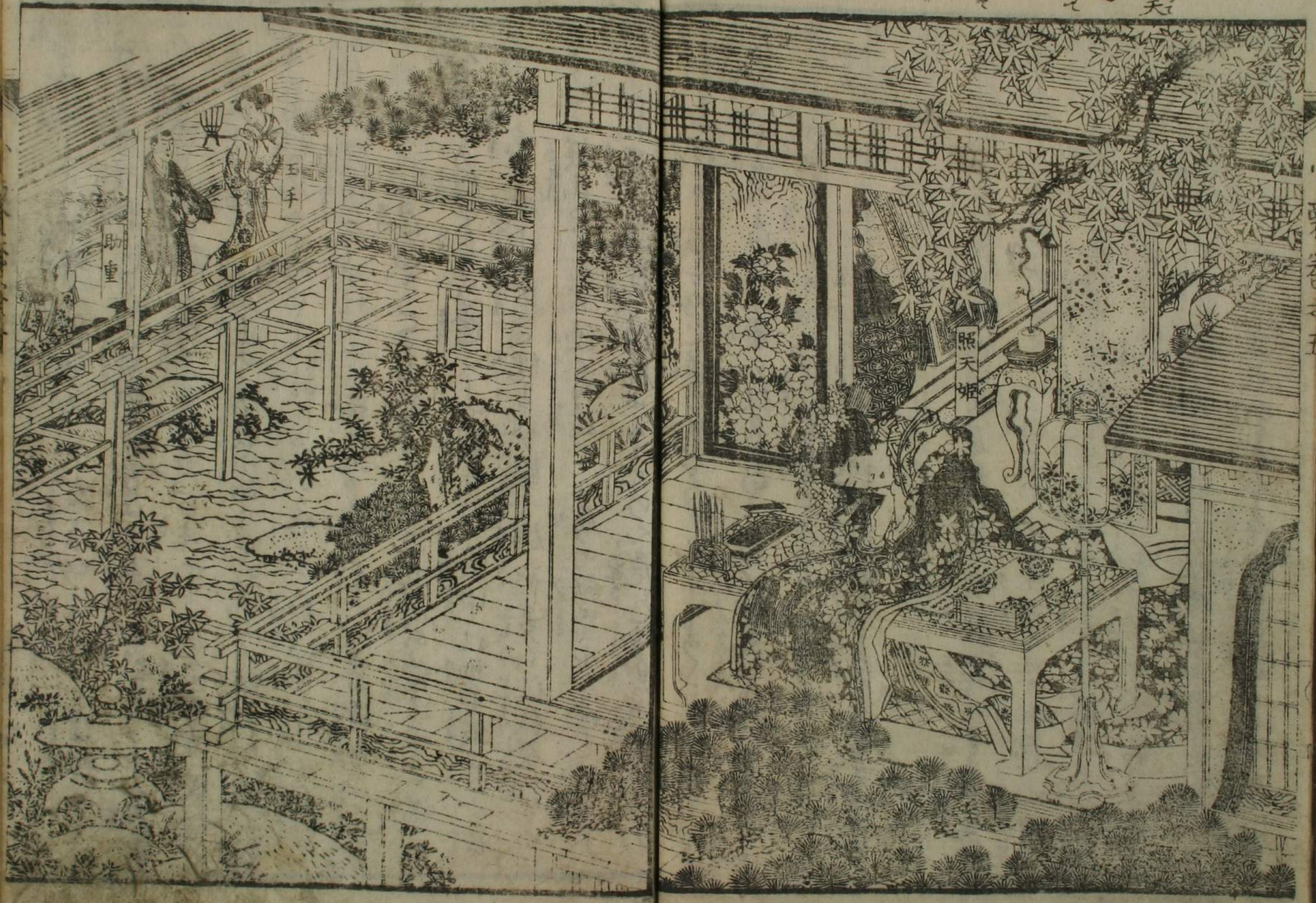
まんと只顧君の風声を窺ふ折うら。不料々姫君君に逢ふは
これと切まふゆえ多しするのみならず人差のほども是東あ
明白と名をふりて強て此家より誘ひ脱ぎて其実否うたれし
君あてもあつた見えまゝ此年迄の眞愛を告げも用もつりありん
おぢめしと。このれ横山との常々殿のふをがめく忌嫌への害心を
懐くと必定なるは此処へ誘ひまゐりしは安秀といへる包み
のふりて道らのこを公に會ひ今夜蜜は姫君をいへる系あり
尚委まきかたしめせ然れども只今中をてて横山とのふは
あつた今山對面の人へ然るく後一人は睡ちのまゝに
蜜は案内しつゝあつた故の別室へ送り出で我子庄司に對
面し小栗は父へあつたを述ゆら今夜姫君をおしと

まんと只顧君の風声を窺ふ折うら。不料々姫君君に逢ふは
これと切まふゆえ多しするのみならず人差のほども是東あ
明白と名をふりて強て此家より誘ひ脱ぎて其実否うたれし
君あてもあつた見えまゝ此年迄の眞愛を告げも用もつりありん
おぢめしと。このれ横山との常々殿のふをがめく忌嫌への害心を
懐くと必定なるは此処へ誘ひまゐりしは安秀といへる包み
のふりて道らのこを公に會ひ今夜蜜は姫君をいへる系あり
尚委まきかたしめせ然れども只今中をてて横山とのふは
あつた今山對面の人へ然るく後一人は睡ちのまゝに
蜜は案内しつゝあつた故の別室へ送り出で我子庄司に對
面し小栗は父へあつたを述ゆら今夜姫君をおしと

五ノ下

四

助重
照天
奇遇
做



助重

五手

照天

西

親との許しうれ妹脊を結ひとるべし。此事姫よへよと道理どつて
 父の止す呪咳筋としていふ君知らずはし一色の勢ひあることと執事
 よりの尚坊の鎌倉中兵衛斗まらふ百騎あまりの従者の其鼓の
 先景の御新よ均しく當直のりの教を知るとかどりの人を討人は鬼
 神あもあれつう十騎や十一騎はしていふよく討はるん一色を討ん
 とおぼする窟竟のふれぬその奈何あるふぞといふ横山と一色
 無二の交あれは刃ひびくこあするこあり其相の俵十人よ満ね
 俵人ありその肘を空規ひ途よく討めり袋中此物を取らるも易
 かるべし一色と横山と睦き鏡と今國に群盗多く征伐及びじ
 しるせと横山がこととる鎌倉近くお居て強盗をなせと討ま乃
 向らぎあつ正しく一色が洪庇あるりの之危れ鎌倉お赴きめりん

よの此地方に刃ひて姫君とよく議り一々かすを待て復維多
 と結められ小栗少しく公助くみ十人の真家傳おも玉をけらふ
 はりしと人と只願凍劫せの助重実りと思ひ人々の誦は従ひり
 娘の喜びいざらふ這裏におとせよと助重を信じて姫の圍は清江
 多の物を圍中に入つてその光景はるるよ多くれ物数寄お匠手
 つつ。美美藤あつるふ空坊の草ありあつるはあひひと清らうか勝
 たる文机は娘のうちりられ物相ひとるさまなると目今助重の
 ちあるふらち敬られ顧くる光景の眉の楊柳の翠と斯れ娘の芙蓉乃
 花の好むる肌を雪ふ光を添はかごとく腰を結束たるふ似り
 雲間を分て晴出る月よりも尚美しく天然の姿色榎本もいふ
 あはれ比せんや正足蓬萊宮裏の神仙よあはれをかうと瑤臺

月下の仙女ありんとはとて石心鐵肝なる助重も心魂天外に託恍忽
とて着とれり。其時玉の姫と對ひ。この年此世とあがと殿乃
とてうりやまの念に後ひきれて。隈なく女へあひて憂に慰め
とて後と銚子土器とり出でしぎまじりせと幼ゆれ。助重照天と打
しうひ。心身と某と。祝の免世妹脊おが。互の家の凶寢も結じ
間とらなるはとて。姫の生死を知れぬ。多くの年を預ねしとも
他一女を祝近ざん。是我父の命をさして。おん身を忘れざる所
とて。ふ今夜不圖に。おとること。正に足更婦の縁に。さる燈と
とて。されん。誓成。做とも。さる妨あるま。けと。縁て。及び。ひ
とて。某父満重の。一色詮秀の。譲よ。よ。て。君の。勘氣。成。り。ま。重
の。城。お。わ。いて。生。害。せ。り。然。且。父。の。仇。を。一。色。を。り。今。生。一。色。を。討。つ。
父の徳羅を易うとせんと。此所まで。ま。り。は。つ。ふ。其。道。は。して。姫と
誓縁せん。と。孝。お。の。と。此。道。理。を。聽。つ。た。多。く。能。を。復。して。后。誓。を
做も。返。う。ら。し。某。の。志。氣。の。差。つ。た。前。ま。り。は。つ。く。化。は。せ
が。れ。を。り。て。察。し。の。人。と。理。を。そ。つ。て。せ。ゆ。れ。ば。姫。と。小。栗。が。さ。る。所。赤。公
と。て。憐。れ。た。へ。た。れ。ば。且。喜。び。且。嘆。れ。免。角。の。回。意。を。せ。り。し。が。想。ひ
ま。ら。せ。ば。横。山。安。秀。明。日。あ。も。我。子。と。誓。縁。さ。せ。ん。と。女。へ。あ。ひ。て。い。く。あ。は。し
や。と。公。苦。く。漫。涙。お。か。き。く。且。し。が。漸。あ。つ。て。云。お。さ。れ。ば。君。は。此。世。心。氣
の。経。ま。つ。た。お。姫。と。も。亦。し。し。も。言。語。を。れ。の。述。く。れ。ば。君。と。奴。が。が
妹。脊。の。間。に。あ。り。ま。け。髪。の。比。より。して。親。の。許。世。縁。故。よ。あ。は。し。父。乃
横。死。お。家。に。お。母。と。つ。ら。と。夢。幻。と。嘆。れ。悲。し。し。お。叔。父。か。り。け。れ
横。山。安。秀。奴。系。親。子。を。は。ひ。て。此。地。方。に。忍。び。居。る。うち。母。の。侍。従。を

直愛^{らまき}の。かさるれ嘆^{なげ}きの病^{やまひ}とあり。なれ世^よの人^{ひと}と知り多^{おほ}ひぬ。此事^{このこと}
 を王^{うさま}手^てが物語^{ものがたり}めて知^しりしゆ。多^{おほ}ひはく人^{ひと}。叔父^{おぢ}横山^{よこやま}の公^{こう}吏^し好^{この}ね
 人^{ひと}み。奴家^{やつが}父^{ちち}りてその子^これ妻^めは。各武^{なつか}が家^{いえ}を再^{また}身^みせん。只^{ただ}顧^{かへ}訪^{たづ}め
 ぬ。且^{かつ}て君^{きみ}をおきて化^{まじ}男^{をとこ}母^{はは}こん人^{ひと}や。死^しを折^ちぎひて辞^{いな}も。斯^{かく}らうと
 獨^{ひとり}枕^{まくら}を守^{まも}りて節^{せつ}を失^うはさむと。明日^{あした}にもわれ強^{おち}く替^か縁^{えん}せん
 いらむ。かあふん。劍^{つるぎ}も伏^かく命^{いのち}を縮^{ちぢ}ん。り。はるこも。竹^{たけ}りあ。憐^{あは}れと
 あが。折^やら。回^{まわ}向^{むか}をまして。あつれと涙^{なみだ}がら母^{はは}父^{ちち}へ。玉^{たま}をす。み
 生^うてまうと。命^{いのち}を。姫^{ひめ}君^{きみ}の心^{こころ}を。ま。か。の。に。殿^{との}は。公^{こう}一^{いつ}。で。姫^{ひめ}君^{きみ}
 の御^ご命^{めい}。さ。い。う。女^めと。も。お。り。あ。ら。ん。り。姫^{ひめ}君^{きみ}の。心^{こころ}。の。上^{うへ}。過^{あや}失^{まち}あ。ら。む。
 過^{あや}。ま。し。父^{ちち}君^{きみ}の。黄^{わう}泉^{せん}。で。喜^{よろこ}ひ。ま。あ。と。お。を。と。や。よ。く。お。お。し。
 了^しる。人^{ひと}と。か。き。口^{くち}説^{せつ}は。く。女^めへ。れ。判^{はん}官^{くわん}代^{だい}助^{すけ}重^{しげ}の。姫^{ひめ}の。心^{こころ}。を。憐^{あは}れ。あ。ら。む。
 玉^{たま}を。か。い。知^し道^{だう}理^りあ。ま。さ。と。が。難^{がた}面^{めん}も。な。か。く。中^{ちゆう}あ。つ。て。云^い出^でる。
 姫^{ひめ}の。ま。ま。と。い。ひ。姫^{ひめ}が。法^{はふ}の。道^{だう}理^りあ。ま。さ。姫^{ひめ}の。望^{のぞ}む。辞^{いな}あ。つ。め。な。れ。も。仇^{あや}を
 報^{あや}る。其^{その}前^{まへ}。は。婚^{こん}姻^{いん}せん。の。婦^ふ人^{にん}。夫^ふの。誹^{せい}謗^{ぼう}め。り。定^{さだ}む。あ。つ。て。前^{まへ}の。心^{こころ}を
 つ。る。お。つ。る。小^こ横^{よこ}山^{やま}強^{きやう}踏^{たふ}せん。姫^{ひめ}死^し。ま。あ。つ。て。我^{われ}。明^{めい}日^{にち}。明^{めい}白^{はく}。姫^{ひめ}が。親^{おや}。人^{ひと}
 と。横^{よこ}山^{やま}に。云^い送^{そう}。は。孫^{まご}て。の。許^{ゆる}嫁^{よめ}め。り。な。よ。も。辞^{いな}あ。つ。め。は。吐^つる。い。ら。む。
 必^{かな}ひ。あ。つ。と。あ。り。ま。つ。る。小^こ玉^{たま}を。首^{くび}に。あ。ら。む。その。道^{だう}理^りあ。ま。さ。明^{めい}白^{はく}
 かれ。と。前^{まへ}。あ。つ。て。横^{よこ}山^{やま}と。一^{いつ}色^{しき}と。孫^{まご}く。親^{おや}。人^{ひと}。交^まり。あ。つ。て。且^{かつ}と。
 安^{やす}秀^{しゆ}君^{きみ}が。姫^{ひめ}く。あ。つ。て。雨^{あめ}さ。ら。う。速^{すみ}く。一^{いつ}色^{しき}と。示^し合^あせ。て。い。ら。む。人^{ひと}。
 謀^{まう}ら。う。ま。信^{しん}ん。され。ば。仇^{あや}を。報^{あや}ゆる。ま。あ。つ。て。お。れ。心^{こころ}の。上^{うへ}。と。危^{あや}し。
 且^{かつ}て。夫^ふ。婦^ふの。誹^{せい}謗^{ぼう}め。り。と。宣^{のたま}ふ。こ。も。心^{こころ}。の。今^{いま}。新^{あらた}く。婚^{こん}姻^{いん}を。求^{もと}め。ま。あ。
 め。に。既^{すで}に。親^{おや}。人^{ひと}。に。許^{ゆる}す。は。夫^ふ。婦^ふの。睦^{むつ}と。結^{むす}ぶ。し。く。あ。つ。て。い。ら。む。こ。も。い。ら。む。

嬖行名をたてんた。姫君と蜜議をせり。一色が討謀を倣ふこと
 賢され尚早めてもゆりて聴しめさるや夫大功の細瑾と顧て
 らけらる。些なれ事ふかしくひ不孝の罪名を後世に遺しめら
 流儀と統めつ位んかた統が助重道理をせめられて我過り免て
 といふ姫の喜びつさるにりりぞ王もがよれとび壁へ入らうも
 眼をうひ姫君この年以憂死忍ひ多はらちあも君のことつと
 多のせせらふ悲をせまひぬる。其甲斐ありて今日目今見く
 こと日次念いぬお観音菩薩と満重とる光とれる靈の交付ふ
 と想ふがいとさくくも妹もこれかる目出な高財お賤のおさき操
 かくも長物結らぬは日比のどひとまの日にらあは心とらちとる
 身と我を妹と一問と退ぬ助重の娘の事とる。紅圍ふ入れの照天
 娘の悲しと想ふ我まふ今夜の運命の娘も心とれめきとるがしく
 教らるるめげぞ忍目か夫の容貌を密ふえら雄偉美丈夫たる
 公裡ひそふおあむ世お女中も多うはあかる美丈夫夫持て景福
 いとぶれ我身うおとこよま喜ひはるる参の襖らら被ら山乃夢
 を結ぶととれが八声の雞ふらち敬るうきれぬふ。玉子か聲して山本の
 神さくびとも。さつとるありあり。ささめくと小栗を誘引りとの別室を送
 かからされが十人の侍臣むを待たけて助重を對ひ一色を討入る謀めりやと
 同く助重別は移るる術は。只玉子がりひより外めんくふ。さわの
 多めぞ。さつとる一色がさつとるを行て本まを。ささめくと鎌倉を討てこと
 止まり。此邊に旅宿せむやと明日横山が家を出せ。此所と
 緋細さるる家やのれと雷ふ。ささめくと吉郎といふのあり。この家

度争り申して旅宿と云はれは堪へぬ主従らふ旅宿して一色はあはれ
 待たされまじく世知のりぬ横山が部下の山城ゆて邂逅此まよ
 迷ひ申すのりぬ切害して其城を奪取つて今小栗主従陸奥
 方の商人と偽りしうと吉郎十一人の光景は宛あふ傭人うら哀れ
 なる足かすらひ東國方あてすのば武士の世は忍ぶまゝあへん
 ぢんとあへんみどりやうと下して害とこそなかりかこく時々の
 動静は窺ひぬ小栗の豫て照天姫と示し合はれぬ毎に
 人の噂静しれを伺ひ姫のりぬに通ひたり吉郎は深くお付くこと
 なれぬ助その照天姫のりぬと通ふことを知り密に申と横山はけ
 るりしうに安秀大に怒り照天の姫婦我子と忌嫌密夫とけりし
 とそ申さうと後ともいふある人せよしくれまじくと俄は照天の姫乃

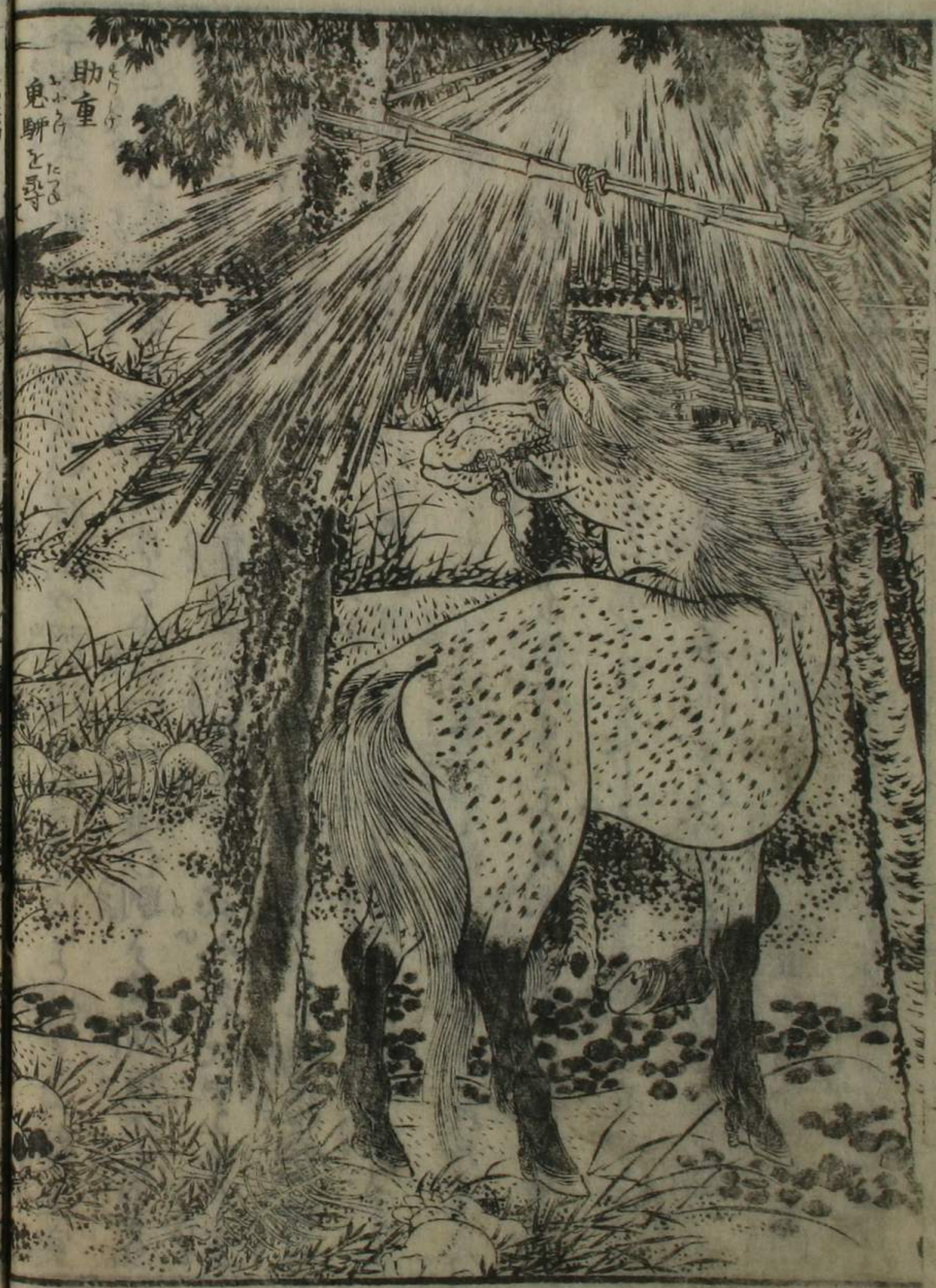
了髪を石捕強く掬向をば彼了髪呵責の厳きお堪へぬ助を
 申りしところの夜毎忍び申するも詳し白は及び一に安秀奴を
 彼密夫とぞ小栗助重に必定せり速に彼と討まんと申し申れぬを
 士郎誅もたれぬ某熟く彼們主従の跡を窺ふも尋常の人よりも
 おぼえを又豫て小栗主従のりぬとやうふりけれ世なる豪傑なる
 はし人教を催し討まんとせが我らが方も害せぬはりの多うおべし
 其上全く討はんとおもむくの難なれぬ謀りて討まはしと速に申は
 安秀実りとおひとと奈何謀る用人と評議する処ふに郎安武進
 出て申ははこれゆき申するにふあふと父が耳もはかすし何と
 からん私語の横山を拍く大に喜びて千金の謀なりと申す日
 横山安秀自ら吉郎が許に赴れぬは豫て示し合はれぬことなれぬ

主吉郎横山を助重が居る次の間詰入酒宴を催し又と興する。
 酒既し周よ及び一軒横山しく酒も酔する舞もて端居せむやと陳失
 助重が居る隔の紙門を開け助重と間詰面を達たり横山懐
 然するおりちめて小栗をえらむはあへうな助重をなれぬとむひ
 するさあてと珍し小栗後何故くぬぬと云うけられ
 て助重不審眉をたつめて横山と危着つ角着つて又驚た爾宣の
 ころ横山後めてはゆきぬころおひつけとてきりして勢付あつても
 なりなり其軒横山云へりる某妹替名武鳥光横苑の后妹
 従信と照天と某はひ退く此地方より忍び居るらち照天や成長
 とれれ豫く許嫁めぬ足下のみと人送らんと存せれと持氏云ふ
 は不審と勢取りしりの女見なれ昔とハ差ひ今ハ奈何もぞと云ふん

足下奴子の匂根と伺やとあうち小妹従信不圖も世母亡きくたりの
 信は足彼の事やまぎれ一日とてさうち足下満重及のほゆと
 を察りぬふははくらくめらるるおと志をさしと想ひ感ひはれぬ
 熟くくそかば射人の信の都りのを何國より忍びあつとともはる道で
 姫と誓婚さるべく所々方々と捜索をせしとさらけ其行態と都を
 めりしふ今日不意此形対面をけること過世の契縁を違ふりいや
 我家におきて前の約と全ふらんとせゆの事小栗の横山のありふ
 信やかなはととせよとゆふ深く疑ひ危角の回意なくさしうあひて
 居るしつ衝あつて云はるる直つとせよとさの腹を以て受ふのころ
 小栗さ亡びぬれらるるも樂事を空しく路路も饑死とせよと
 行方の果のちるおきを憐れとおほし古け好身と今に捨身した厚れ

あを垂るふ。心意なくこそ嬉しけれ。明日を以て籠まするの感徳の
 きふんと申すは。横山は。然るに明日。我家は。いづれか。必
 待まらんことを云つ。主吉郎は。對ひ。明日。此客人を。我が。侍ひませ
 且と。親父は。金小栗。別と。生れて。なり。去る。小栗。十人の。侍臣。以
 行會。密に。云へり。は。我。主。從。忍ぶ。こと。能。横山。申す。も。知り
 是。この。不思議。なり。彼。素より。心。か。ね。回。なり。今。の。い。と。く
 懇。意。なる。こと。云。笑。ゆる。こと。を。能。足。る。も。縁。故。あり。こと。
 さ。め。れ。彼。が。鎌。小。姓。の。いと。危。う。く。け。と。往。る。時。の。時。なり。と
 い。は。ん。その。念。の。事。は。横山。何。の。より。せ。做。ん。明日。彼。が。從。ひ。て
 着。下。と。あ。る。ふ。十。人。の。從。は。本。一。般。也。横山。が。鎌。小。姓。也。
 の。支。へ。と。あ。る。後。と。彼。も。何。なる。謀。なり。置。ん。も。知。ら。ん。が。

今夜密に姫君お遭ひ。横山が隠謀。父も入りしと。鎌倉。助。重。実
 の。肯。ひ。其。夜。密。に。照。天。の。り。と。忍。び。行。通。ひ。馴。は。筑。垣。の。崩。より。
 忍。び。入。ん。と。と。は。人。多。く。集。む。と。衛。居。せ。れ。入。ん。と。空
 志。旅。宿。に。立。戻。り。十。人。の。人。々。對。ひ。事。の。詳。も。物。語。れ。加。藤
 加。藤。郎。近。と。出。て。横山。既。に。殿。の。姫。君。の。心。と。通。ひ。ま。ふ
 こと。を。知。り。番。兵。を。置。く。こと。は。防。に。密。計。を。知。ら。し。め。と。せ。た。ら。ん
 ち。か。り。て。相。つ。か。明日。横山。が。鎌。小。姓。也。と。止。り。あ。り。彼。が。侍。ひ
 兵。を。伏。し。君。を。討。ま。せ。んと。謀。ら。ん。人。々。の。想。ひ。多。く。あ。る。ふ
 渾。一。般。に。加。藤。の。中。に。さ。る。と。露。差。あ。ま。じ。く。れ。君。が。戒。心。多。く。必
 虎。穴。に。入。ら。ん。兎。角。に。往。ら。ん。は。如。ほ。と。鎌。倉。助。重。実。を。傾。け。志。す
 沈。吟。し。て。お。ち。たる。が。御。中。に。云。へ。ら。し。加。藤。郎。が。答。へ。り。是。れ。下



然われ我母十人の豪傑あり。彼へ烏合の盜賊あり。いふ母猛しとつゝも
 恐ろしく足るは明日速に横山が館に赴き其耐宜より却て横山一
 家を生捕雙敵一色詮秀とて母あひきつとて術をせんぞ人々勅て
 我母助くんと念然として母はあふ誰あつて再び誅んそのも形く終ふ
 其命母よりしり。嗚呼小栗助重智謀勇畧あり有ふよつて横山
 と慢り。加茂が誅を耻と横山が敵に至り終ふその謀計母當られふと誅
 の厄難母かゝるは小人とて慢べくは古人の確言宜るはばや
 斯てその翌日にありし小栗判官代助重多しく狂ひ十人の豪傑や
 太刀衣服母至るまで善をそして助重は陪從横山が館に赴き終ふ
 彼方あも憐て其脩儀やあつるは門迎あ盛砂しとて清らうは掃除
 きて結受する。小栗既母其門迎母到且は家長めはるは漢子出しく
 正堂母はひ烟茶の餐意そり母主横山五人の子供を以て生かして
 對面し我子を二助重はひはあつるは助重も十人の侍臣は横山は
 多ふ入りしり其後横山佳酒美肴をめて母はに餐意しさて横山の
 云中。明日母へ母のしり今日照天足下を送りし人彼を
 今父も母もな。親となるは母のほし我不肖なりといふども照天が叔父
 なるは母我女見して誘ふ。されば公將塔改りての見とあつるは門出
 物を母もいづく。そしてとわらふ。左郎も母今浪を鑢はは鞍籠を小栗
 が前へさし居る。この山境のどく取つるは母あつるは聲を母あつる
 こそなり。我まこと母塔よりしての門出物に望まあり。と母あつるは助重は誅
 籠とおし裁た感謝を述て后とを中。我が旅中とらひ父の擯斥を怨む
 既に年経つるは一物の時さしさの形がら物もいさるもれば。ともいさる

物の望まぬとて心から横山より来ひ近日子供はほろり馬のゆがめりりの
 荒馬なれがよお坊へを後園の郊辺に暫くおどろき其馬よりの鞍おひく
 一馬場をたてえせまこれお上りて引出物のあじこすそお助を公の裡
 みの此馬こそ故めり爾ととも馬ふらめぬるまのわたりをぬるまめや
 とらつてまひつ回意ははかこらひより易れとふとぞ其馬場あれたま
 える方お安内へてまじとこもなげおまりなれが横山はひ三郎や
 居る葉内へはかたせよとあはれ三郎安武いざまへとて前おすめぬ
 小栗判官代助を十人の御堂を引俱へ安武の殿おつひて前裁おまり
 歩こそ三丁より母して一箇の門をとおすの助とては郊原より此時候
 九月の未だれが秋霧勝勝と四方ふたれりりお枯残る秋や三郎
 の風お音さるる憐れとてさぬくはへり此府に安武遙く指はち
 對ひおんへては細流お添はる木林こそ彼馬を暫くおどろし彼所
 まても安内へてはなれと馬場のりけをもせんぞまてのまの目
 より人々の彼所へおとせよと云はれ慌忙けお走り去ぬ小栗主従目と
 目を又合へ三郎が安内よりぬるぬるおほれぬ此馬子細を有ん
 かたはらばゆとよとのりるお人への命まてもめりり此馬お望んでい
 るおまをとりはくと互におまを励まし生後りる萱草を分て
 るどりの行既お既近くらるる秋風の凄然と吹あつれ千草をまて
 虫の音のそれらあはれぬる哀げぬるありのこそめりり主従四方
 てお助王耳をそむくと驚く笑けがらへり人お呻く声あつこをまし
 と其声お知る人お歩行お歩し呻声の近くらるお其辺の白骨お
 として砂石のまじりて従これと人怪しきまりるくこの斬罪をれ

場あやと丈あゆまる萱あしとけて四方とらるあ死して幾日もらね
 とおわしれが算尺散せはうとてくまらひ居り。それが中あまこ小ま
 に綁められ六十のまりの漢子ありいと瘦瘠く顔は炭のぶく
 まみとれが若しげも呻れ居れり助重とれん池庄司して生録故
 を同ししゆ彼浄子若しき息が衝くまらしはあ我を同しるあ
 方と奈何ある人もくほくまらしといふが庄司今此あはつて
 あり小栗判官代助きう従りの汝が身の上りしてこふ綁められ
 はらるめを流りゆくと。あれ彼漢子いと驚きひは風情めて首が
 りとげ助をを着一着てりまら君の甚むる知るしあさるんれ
 まらと君がよく知るり斯まのうとりの名武たる光の下僕道助
 とやと考あてはりぬ前年う人光相模川を横死の初り某

供あてひはけつ。さても主人馬光の水死を横山があててくまらり。
 其附のこゝろ爾とあてひきと馬光横死の附の光景を詳らふのべ
 某もその附川からちひれぬはを幸ひ水心はぼるれば水中ふらち
 こまれとれとせま水の底は深り幸じて命助でうり主の死する
 とらるがらのあく館へ還るが身のか疏まがく生國武義乃國
 金澤なれば彼とらも退忍ひ居らうら勿ら主家とひ内君の姫君
 もその行末を知らざればいと乏赴のありとも在家知れぬ詮と入
 りく勢附故郷ありけるが熟く想をて下郎と云ながらこの家
 船を目のあつりこはけこのまき止るらうのせめては能く横山と
 内君や姫君お告すわくせんと故郷をまらふ方と主のゆくへは
 尋ね巡るとかひの知れれば下まら故々お還ると此地方おまらひ

不圖横山は出合。この光景もなりのなりのね。那て死するお殺のあふ
 今日何の幸う君を見まふとる。お殺の君正しく照天姫の女塔
 あくつらせまふの姫君は還合もやとれ某が今日のま次告まふ
 此夫婦を仇人横山を討まひ言光君の後羅の血を合を替り
 と説話の小栗を従とめて横山が夕武を害せしことを知り道助が
 健氣の志を賞し主従此地より去ることをとめて照天姫の
 遭はると横山此野を殺系を馬を殺れといひておちもく
 詳は父へその馬のうらゝる縁故のや汝知らず語のまじ後とめるお道
 回馬を殺る某此の郷ら追討前某がぬれぬのあり彼若語は
 ぬれ我くごごころとや解ぬ人ぞ此世お殺もく鬼駢とら馬の
 妹もとる彼馬は下総の小金めて生立一駒の奇代の逸物なれば
 下総国守より鑑倉へなんとする牽馬りし横山安秀侍は道
 は行らけ存あひつと横山一家の裡此馬をぬるの形をぬれんと
 結て賣渡さんととれと其人をばと空しく殺系をぬれんと不用馬
 ならればよも解ぬと馬の心も足次憤りてや解の馬は妹も金
 の買まひ花うりて食ひ殺しる。これより人をえと食ひる。お
 形て一ツ厩を繋ぎてとれと此野の中お堅固なる厩と管をば
 はあまぎ置ね横山の盗人の大軍なれば大勢連は旅人の物多
 ととれ解附の此馬を狩りて逐ひ殺し其終と乗して荷物や奪ひ
 又捉へまふ旅人ぞ某がてはて馬を食ひぬ。お殺の猛は荒馬
 かねが誰いあてなく鬼駢とて名名せりて今君とて此鬼駢を
 さらしむるは荒馬は食ひぬ。相かまてよく戒公はしる。

といと苦しげな物語終りしほしくなりたる小栗の道助があつた最
 初を憐みしやうなまへに物語を熟くぞとぞかかるといふく知らぬ
 笑て云へりなれは嗚呼愚なる安秀うお我鑑角の其むじ名武が館や
 おぬを彼とら法のの子を論じたりし我上お出々として社を其付より
 去て我は傲き懐りされが今不圖此下よするを幸ひ昔の怨を
 報んとせばあるべしとひまをせら横山の舅の敵あふの仇なりと
 此老賊を殺さむやうといはまけが池庄司と初め風間田辺義登の初巻
 を振り腕を摩りて悪れた横山が行状お命のどく早くこの老賊を除け
 る人とをかりかたは加者兄弟これを止め君をどじぬ人と此情りのさる
 ことながら君の天候傳おせざるの仇ありそれをも討ち私の仇を先お
 するありは何の道理ぞや今横山が光景を定むる部下已ま多し

一 若過失のら一色とい誰かして大殿の修羅を安んずる人たる
 前の小栗の突嵐のるお千金の誓ひを白くしやうと流しを
 小栗此法を聴くややく其憤をおもはる。雨のれ一旦横山は鬼斬
 るんと約せむ。此事おしむるおとと再び草紙あみかしてて殿乃
 おお到りて其光景おんるお太さうける柱を破り十文字おらみ足を
 大鴨蝗絆りて打はけり。株所おはく後お人の出入をほごりの
 扉あり。堅く貫木を鎖せり。蜘蛛の隙より裡を窺おハすくるとこえ
 けは太く違はた駢な馬のり髪も髪がねが生かふりて移も定
 うふく之後と眼をさくは是くして乱し一髪の際より人たふらまを
 閃くして電光のこし尾の長くして牙文のあまねり。太に鏡の鏡を以
 四方へ引はり較ぶたはが。只今人これ事をえん例の人林らるといひ

まくろくして嘶けりさうも丈夫かや入るれ既揺動しつりりれあて
 小栗これと着て天晴良馬うねる幽王の八駿頂羽が驩りもたぐね
 るたしなと新母もわれ鑣のこげのけのり。そのおぼさるやあるまこと
 既五をあんともを加賀土加次郎をみ出君おあひて此馬をあはれと
 されあのあはれと知る異なる馬かろぐしくあまのしあふひとも
 過失あはれ悔してかくぬ事なり。不知おほしきりあはれと流身を助重
 刃を左右りうらあり否汝が凍さるるあがら枝山我と亡くと此馬の
 力を借る。りしあはれと知る異なる馬かろぐしくあまのしあふひとも
 仍るれを罪としつりりる謀人用人も知るべし。その馬はあはれと
 まるは行をりて天下と利するのいしう小猛しといふとも素これ馬
 うねる。いして人をあはれと知る異なる馬かろぐしくあまのしあふひとも

と云はく。風間兄弟をて鬼駢を奉生はし枝山がふへ鞍籠をかけ
 手懸かひつりあはれと打まひと静やうあまのしあふひともは猛き鬼
 評の小栗もあはれと知る異なる馬かろぐしくあまのしあふひとも
 怪しむれ十人の郎きこの光景をいしてはく感賞し君の馬をうねる
 する傭人の及ぶれあはれと知る異なる馬かろぐしくあまのしあふひとも
 あはれと知る異なる馬かろぐしくあまのしあふひともは猛き鬼
 此業神機微妙我門の及ぶれあはれと知る異なる馬かろぐしくあまのしあふひとも
 笑ふて我もかやとあはれと知る異なる馬かろぐしくあまのしあふひとも
 事よ。いさやとく庭をあはれと知る異なる馬かろぐしくあまのしあふひとも
 越へる十人の郎き馬の四方をとり囲み。いと身一道を分け行せぬ。



助重
鬼駢
鞭
馬術の
と
宗
を



川
東
卷
六
上

うちを寛くして歩ませしむる事さうふと驚くこと入とてあはれ
 ざるや。や馬場のりけも整ひて足きてはしむる事さうふ
 のさう人として馬場ふ案内一父の安秀が斯と生れは横山安秀の生れ
 相違し頼まざるは鬼駟をいと易くさゆ事さうふ不思議な事
 再のれ素鬼神もあはれ其術をささじ仕換して馬は食せん
 と子供五人引俱し馬場は出するは助重安秀がてるさうの下
 一乳して下たるは糸切まより馬を好む此年以常陸は居つたは助
 の馬とも多くをゆひしうと此鬼駟がことなりの天晴の良馬とて
 なるはとありたるは安秀のあはれ後どのと並びははたす難し
 笑てしりける前刻も中はしり此馬えりけるは尋常ふ事と
 なればさうこそ終のゆめと乞求めたりし事いと猛りして海もな

ゆと宮子く厥母駟たあはれひけるは足下斯むる容易な事
 こそ實ふ其人をゆひしうとすべし是此馬の終もつて天晴
 足下の馬道の聖人あはれとありたりは此馬もて世の中を其盤
 小椅子乗してさへさむひやんとえられ小栗心裡彼我難事
 を云りけ疎失せん謀あり悪事も悪しと念ははる完示と打笑
 某爾の戦ふのころ足下をてはするは終と横山及の望ありはげ
 せん風懐る事あはれあはれ免れ終へと回意され安秀速く事
 さむは堪へると子供さうふち對ひ早く備仕すれと下知され
 心留めと回意して去去はあはれ椅子と其盤とを携へ出馬場中
 央あさし歩の小栗とあはれさむは椅子と其盤とを携へ出馬場中
 椅子持いと云下義のねと池庄司法と出て二は母あはれ椅子

して野に舟を建て馬場の東詰に押建する。其光景仁工を造り扱じ
 うはがこころ。勇ましくおそるべし。いづれもぞつとてをれ小栗とてを
 こんで鬼駢ふらち。馬場を西さぬ。静まふまをせらゆ。西詰めて
 三四回輪をめぐり。一鞭撃よと着へ。馬の平身ふるり。東にきて
 池出る。其迅こと矢よりの。中。庄司助長が持は。楳子と定せ
 昇ること。平地を行が。に。めを。庄司樹子を持。堪は。着有
 此も動く。地より生ふる。老目。色を。小栗
 と馬に撥指ふ。あり。上手。楳子。扇を。あて。静
 と糸下せ。その光景を。居る。行の。小栗が。馬術。庄司が。勇力
 世も。少。事。な。ん。が。嘆。然。して。歎。賞。せ。り。横山。小栗。主。従
 が。武。威。を。こ。こ。心。裡。に。感。ず。る。た。ら。我。力。に。て。討。た。ん。こ。と。難。し

多くと尚鬼駢をれ。想へ。小栗が。術助長が。勇力と賞し。再び
 其盤ふの。こ。み。望。め。助。重。辞。ま。して。又。鬼。駢。を。ま。ま。せ。其。盤。の
 りと。お。近。げ。も。盤。の上。へ。馬。の。四。足。を。上。せ。る。盤。中。に。あ。ま。り。を。た。た。ん。て
 小栗。手。綱。を。か。ひ。り。て。馬。を。踏。ま。せ。る。跡。の。蹄。の。こ。も。も。盤
 の。上。ふ。を。の。め。り。三。回。ま。で。盤。の。四。方。に。ま。ま。し。り。其。光。景。人。間。業。と
 へ。た。れ。ん。物。の。人。を。舌。を。巻。賞。瀆。せ。ら。れ。り。と。り。り。



